

今回のプロジェクトでは、学校の授業では体験できないようなことが体験することができました。また、普段あまり接する機会のない他学部の生徒と交流することもでき、とても充実した2日間でした。

1日目の初めのワークは「患者さんに見えるチーム医療に必要なものは何か」を班で考えるものでした。「患者さんに見える」ということに重点をおいて考えた結果、チーム医療に本当に求められることを考えられたと思います。

次に乳がん経験者の方のお話を聞きました。驚いたのは、私の班に来た方は「乳がんになることで人間的に成長でき、よかった」というお話をされたことです。がんと告知されるとうつになることもあると学校の授業で聞いていたので、このような患者さんがいらっしゃるとは思っておらず、本当に驚きました。しかし、この患者さんたちもがんと告知されてからしばらくは本当につらい時間を過ごされたとおっしゃっていました。そこから立ち直るまでに、医療関係者の配慮や、同じ乳がん患者さんとの交流があり、それらに救われてきたそうです。私たち医療関係者は、知識を蓄えるだけでなく、患者さんの気持ちを支えられるような人間性を身に付けていかなければならないと強く感じました。

また、コミュニケーションの練習も行いました。チームを組んだ初対面の人と実際に数分間会話をしましたが、緊張やぎこちなさがあり、うまくできなかったように思います。薬剤師として働き始めれば、服薬指導として初対面の患者さんと話す機会が多くなると思いますが、そういった際に患者さんとうまく会話ができるように、今回学んだ話の聞き方を意識していきたいと思います。

2日目には、EBMとは何かについて学びました。与えられた情報から、それをもとにどのようにそれぞれのテーマに対処すればいいかを考えることによって、EBMの基本的な考え方を学びました。私たちのグループが与えられたテーマは、「風邪を引いた妊婦さんが、妊娠中であると伝えただけで医者から薬を処方されたが、不安を感じる。薬を飲むべきか？」というものでした。細かい情報が与えられ、それに従って考えました。ネットや噂などで情報が多くある中、患者さんに不安を与えないためには、医療関係者と患者さんの間の信頼関係を強くし、また、患者さんが納得するまでしっかりと説明を行うことが必要だと感じました。

2日間を通して、一番強く感じたのは、医療におけるコミュニケーションの大切さです。学校で授業を受けるだけだと疾患や薬に関する知識を得ることが主になってしまい、実際の医療現場で何が大切なのかということを考えられずにいましたが、今回のプロジェクトで、患者さんに何が必要でどのようにしていけばいいのかを改めて考えられました。また、現場でご活躍されている先生方とのお話や、とても意識の高い他校の学生との交流は、良い刺激になりました。今回の経験を今後の勉強に活かし、これからの医療に貢献していきたいと思いました。

このたびは貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。